

大麦散播栽培の播種量

古川農業試験場

1 取り上げた理由

麦類では越冬前の初期生育量が収量及び品質に大きく影響するため、適期に播種することが重要である。このとき、播種作業の省力化が適期内播種の一助となると考えられ、省力的な播種法として以前に大麦散播栽培（全面全層播き）により安定多収が得られた事例が紹介されている（普及に移す技術第43号参考事項）。しかし、現在の本県大麦奨励品種「ミノリムギ」、「シュンライ」については未検証なため検討したところ、安定した収量、品質が得られる播種量の目安が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

- 散播栽培では、「ミノリムギ」、「シュンライ」とも10 aあたり12～15kgの播種量により慣行のドリル播きとほぼ同水準の安定した収量、品質が得られる（図1、2）。

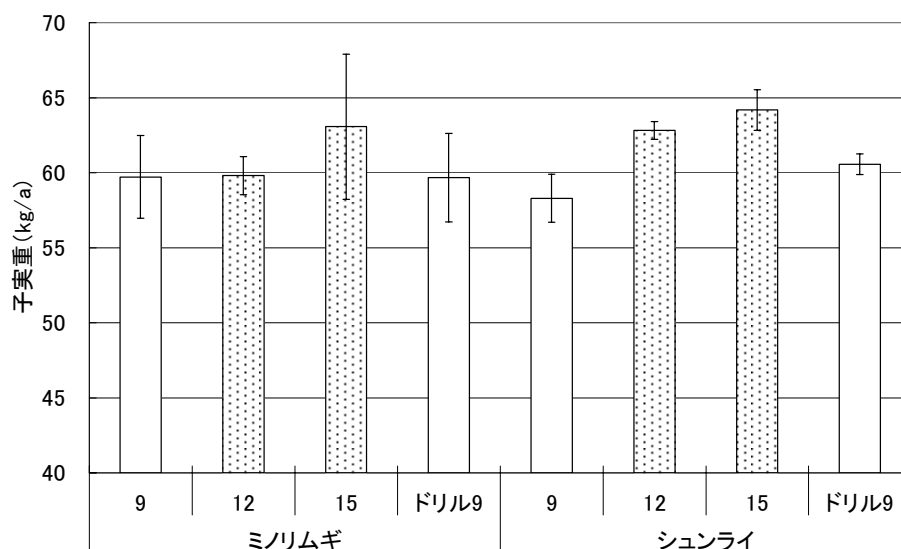


図1 播種量と子実重（10月中旬播種：3か年平均）

注1）図中棒線は標準誤差

注2）上段の数字は播種量（kg/a），ドリルは慣行ドリル播き

3 利活用の留意点

- ここに示したデータは、古川農業試験場（北部平坦）において平成16～18年度の3か年に得られたものであり10月中旬は10月15日頃である。
- 播種作業は散播栽培と慣行ドリル播きでそれぞれ図3に示す作業工程で行い、秋作業の他は散播栽培も慣行ドリル播きの栽培管理と同様に行った。
- 播種深度が不均一な場合出芽揃いが悪くなることがあるので、事前の砕土（砕土率70%以上）と攪拌耕深（5cm程度）に十分注意する。
- 播種の遅れは収量、品質とも低下の原因になるため適期播種に努める。

（問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229-26-5106）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

転換畑における麦類生育と均質化技術の確立 (平成16～18年度)

2) 参考データ

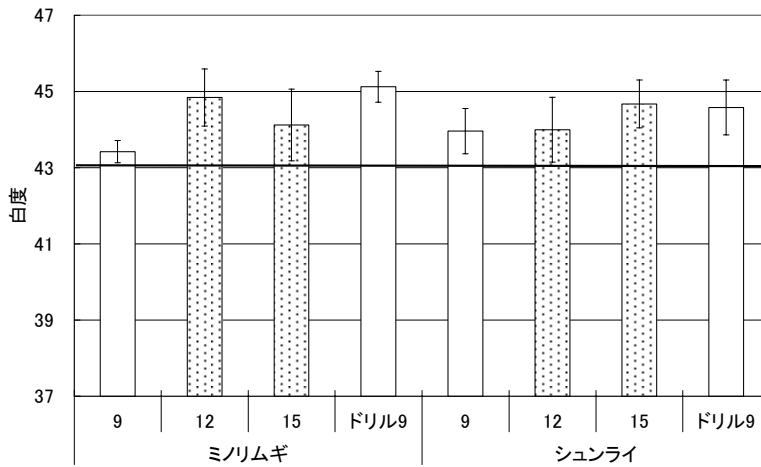


図2 播種量と白度 (10月中旬播種：3か年平均)

注1) 図中棒線は標準誤差

注2) 上段の数字は播種量 (kg/10a) , ドドリルは慣行ドリル播き

注3) 白度は歩留55%で測定。図中横線は品質評価項目の基準値 (43以上) を示す。

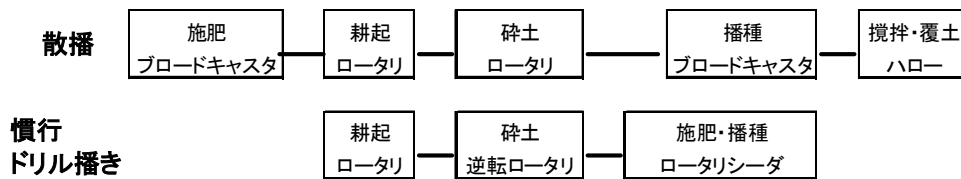
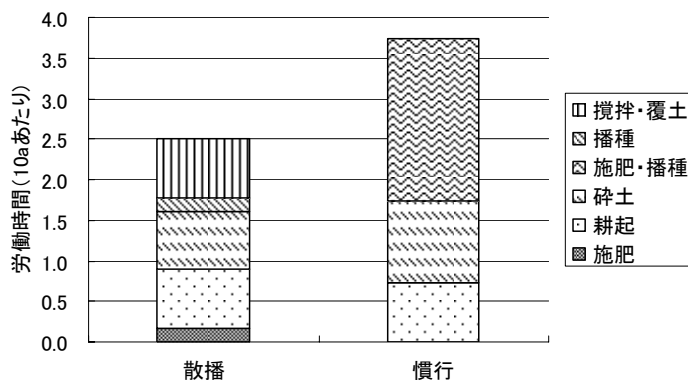


図3 散播とドリル播きの作業工程



(参考) 散播と慣行ドリル播きの秋作業10a当たりの労働時間の試算

注) 宮城県営農基本計画指標から試算

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

a) 転換畑における大麦 (全面全層まき) の機械体系 (第43号参考事項)